**衰退していく産業を草の根で守る**

モザイクタイルミュージアムは、タイルの生産地として有名な笠原の町にある。笠原には1900年代半ばの最盛期には100以上のタイル工場があり、国内市場の大半を占めていた。

笠原の陶磁器生産の歴史は約1300年前から始まったが、笠原の製陶者がタイルの生産に力を入れるようになったのは20世紀に入ってからのことだ。第二次世界大戦後、笠原の経済は、復興のためにタイルの需要ができたことで好景気を迎えた。その後、1980年代後半から1990年代前半にかけて、高層ビルの建設に外壁用タイルが使われるようになり、第二の黄金期を迎えた。しかし、21世紀に入ると、ライフスタイルの変化や新建材の登場、海外メーカーとの競争などにより、業界は大きな打撃を受けた。

今世紀に入ると、20世紀のモザイクタイル作品の多くは、それらが貼られた老朽化した建物の取り壊しに伴い、破壊の危機を迎えた。笠原商工会議所の主導のもと、多治見の個人がモザイク作品を入手したり、引き取りを始めた。そして、これらの作品を展示する場所を作ろうという話が出てきた。お互い競合関係にあったにもかかわらず、地元のタイル会社、粘土会社、商社などが協力してくれることになった。その結果、モザイクタイルミュージアムが誕生した。ミュージアムではタイル作品を保存するだけではなく、タイル産業の支援も行っている。館内ではタイル作りのワークショップが行われており、2階にはタイルの装飾的な可能性を紹介する16の展示ブースがある。